

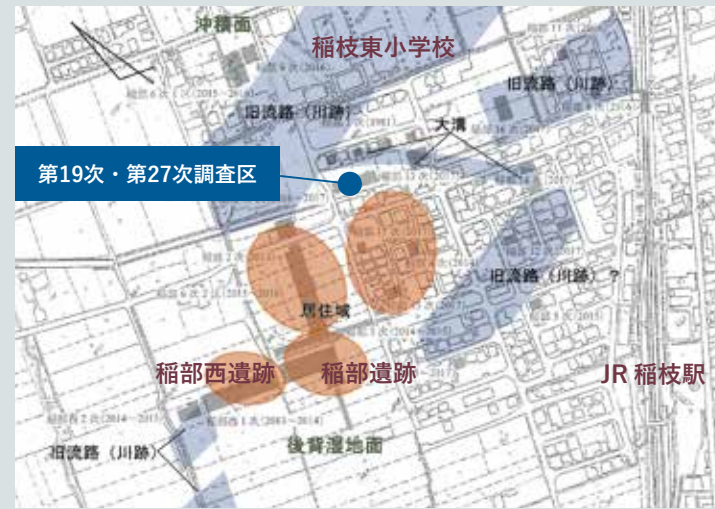
おびじょううるしぬりせん い せいひん
3世紀の帯状漆塗繊維製品

稲部遺跡第19次・第27次調査の成果

Lacquered fabrics in the third century, Early Kohun period
Inabe Site The 19th and 27th excavation, Hikone City



19次SD02溝の土層と杭跡(南から)
手前の底は細長い土坑状です。下層はシルト層で、機能時は水が流れていたとみられます。上層は炭を含む自然に堆積した層です。溝の両端に杭跡がみえます。



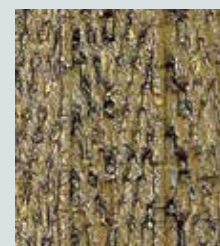
調査区の位置と稲部遺跡群(稲部遺跡・稲部西遺跡)の広がり 弥生時代終末期頃(約1,800年前頃)



19次調査区西端部(北東から)
写真中央の溝が帯状漆塗繊維製品が出土したSD02です。その南には居住域が展開し、SD02との関係性が想定されます。



帯状漆塗繊維製品のひも通し部
硬い繊維を使った長さ1.3cm、幅1.0cm程度の帯を2条くりつけており、古墳に副葬された靫とよく似ています。



表面(拡大)

経糸が密に表れて突帯があります。漆膜が良く残ります。



内面(拡大)

平織様組織。漆膜が表面ほど良く残っていません。



帯状漆塗繊維製品
長さ5.5cm 幅7.2cm
2枚が重なり、帯状漆塗繊維製品が土中で潰れたものと推定されます。



帯状漆塗繊維製品
長さ19.5cm 幅4.85cm
幅が狭い方の両端が下へ回り込み、この真下からともとつながっていた可能性がきわめて高い断片が出土したことから、帯状を呈する製品であることがわかりました。

■綾織物(あやおりもの)とは

綾織物は、経糸が緯糸を2本越し、交差する織組織です。稲部遺跡の帯状漆塗繊維製品は、経糸に撚りのある絹糸が、緯糸に植物繊維が使われ、高度な技術で織られています。綾織物としては国内最古であり、注目されます。

漆塗繊維製品の調査では関係者・関係機関の方々にご指導、ご協力いただきました。

はじめに

稲部遺跡は、滋賀県彦根市稲部町・彦富町に位置する、弥生時代の終わりから古墳時代の初めの拠点的大規模集落遺跡です。2019年8月から2020年1月(第19次・調査面積351.92㎡)、2021年5月から7月(第27次・調査面積105.00㎡)にかけて宅地造成工事に伴って発掘調査をしました。この調査における古墳時代初頭(3世紀)の帯状漆塗繊維製品の発見は、古墳時代が始まる頃の社会の様子、紡織技術と織物の歴史を考える上で重要であり、多くの関心を呼んでいます。

帯状漆塗繊維製品 2019年(令和元年)9月19日出土

彦根市稲部町に位置する第19次調査の居住域の端の溝から、帯状漆塗繊維製品の複数の断片が出土しました。保存状態が比較的良く、一緒に出土した土器の特徴、漆塗繊維製品および一緒に出土した板材の放射性炭素年代測定によって古墳時代初頭(3世紀中頃)のものと時期を特定することができました。帯状漆塗繊維製品は、絹糸と植物繊維による綾織物で、黒漆が塗られ、その特徴と出土状態に基づく検討から、靫と呼ばれる武具の一部と考えられます。織組織や特徴から、箱状の矢筒部に巻かれた複数の横帯の部分である可能性が高いものです。

■靫(ゆき)とは

靫は、矢尻を上向きにして矢を収納する細長い箱状の武具です。織物、革、繊維、漆、木を組み合わせで作られました。背負って使われたものがあると考えられ、背負う際に体に固定するためにひもを通す部分が伴う例があります。主に古墳時代前期(4世紀)の古墳に副葬され、有力な首長の権威を誇示した威儀具と考えられています。稲部遺跡の出土例は、これまで確認されていた古墳の副葬例よりも時代が古く、3世紀の拠点集落で出土したという点できわめて大きな調査成果です。



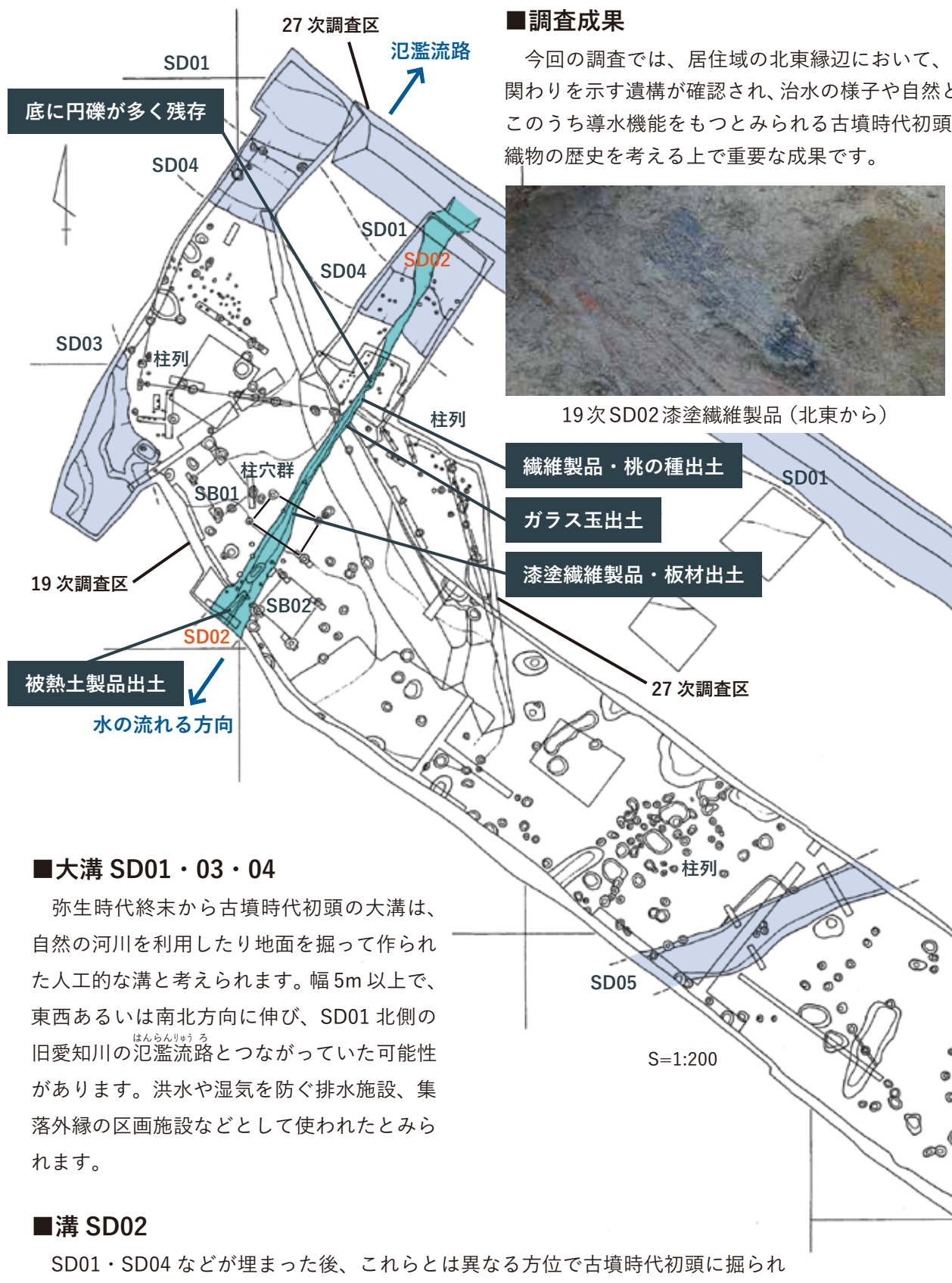
帯状漆塗繊維製品復原イメージ

3世紀の帯状漆塗繊維製品

稲部遺跡第19次・第27次調査の成果

2022年(令和4年)3月発行

編集・発行 彦根市文化財課
〒522-8501 滋賀県彦根市元町4番2号
Tel: 0749-26-5833
Fax: 0749-26-5899
E-mail: bunkazai@mx.hikone.ed.jp



■調査成果

今回の調査では、居住域の北東縁辺において、排水や集落の区画などの機能をもっていたと考えられる弥生時代終末から古墳時代初頭（約1,800年前頃）の複数の溝を検出しました。人と水との関わりを示す遺構が確認され、治水の様子や自然と対峙した集団の知恵や技術を知ることができます。これらの溝は、統率力と土木技術をもつ集団によって計画的に掘削されたことがうかがわれます。このうち導水機能をもつとみられる古墳時代初頭の溝からは、靱の一部と考えられる帯状漆塗繊維製品などが出土し、稲部遺跡の3世紀の拠点集落の性格、古墳時代初頭の社会の様子、紡織技術と織物の歴史を考える上で重要な成果です。



19次SD02漆塗繊維製品（北東から）



19次SD02（北から）

溝の周辺に掘立柱建物と並列する複数の柱穴が位置し、覆屋などの構造物が付設されていた可能性が考えられます。



19次SD02漆塗繊維製品・板材（北から）

長さ1.51mの板材が溝に沈められたような状態で検出され、漆塗繊維製品の複数の断片は板材に接して確認されました。



27次北端SD02底の円礫と土器片（北から）

丸い石は15～20mm大のものが多く、稲部遺跡の位置する氾濫平野よりも上流域から持ち運ばれた可能性があります。

■大溝 SD01・03・04

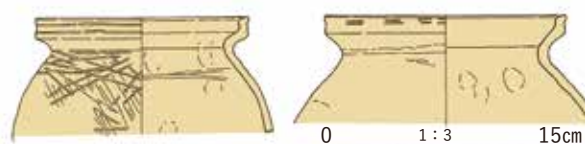
弥生時代終末から古墳時代初頭の大溝は、自然の河川を利用したり地面を掘って作られた人工的な溝と考えられます。幅5m以上で、東西あるいは南北方向に伸び、SD01北側の旧愛知川の氾濫流路とつながっていた可能性があります。洪水や湿気を防ぐ排水施設、集落外縁の区画施設などとして使われたとみられます。

■溝 SD02

SD01・SD04などが埋まった後、これらとは異なる方位で古墳時代初頭に掘られた最大幅1.6m以上の直線的な溝です。氾濫流路に近い北から、溝の底に円礫と土器片が溜まる部分、細長い土坑状の部分、底がV字状になる部分があり、上澄みの清められた浄水の生成と流水を意識した構造です。木樋は検出されていませんが、氾濫流路から居住域への導水機能をもっていたと考えられ、周囲の杭跡、柱跡、柱列、掘立柱建物と一体となった導水施設であった可能性が考えられます。希少な遺物として、帯状漆塗繊維製品、繊維製品、板材、ガラス玉、被熱土製品、桃の種、他地域の外来系土器を含む土器群が出土し、浄水を利用した首長層に関わる水辺の祭祀や何らかの儀礼が執り行われた聖域であったのかもしれません。



19次SD02漆塗繊維製品の検出



19次SD02上層出土土器 近江地域で作られた甕形土器



19次SD01出土小型土器



19次SD02漆塗繊維製品 近景（北から）



27次SD02下層出土土器 布留式初期頭の壺の口の部分



19次SD02下層出土外来系土器 赤く塗られた壺の口の部分